

ISSN 2186 – 3989

古典日本語係助詞共起文の構文解析に関する覚え書き

坂田 一浩

A note on syntactical analysis of sentences including co-occurrence of
Kakari particles in the classical Japanese

Kazuhiro Sakata

北 陸 大 学 紀 要
第53号(2022年9月)抜刷

古典日本語係助詞共起文の構文解析に関する覚え書き

坂田 一浩*

A note on syntactical analysis of sentences including co-occurrence of
Kakari particles in the classical Japanese

Kazuhiro Sakata*

Received June 27, 2022

Abstract

This note treats some problems about co-occurrence of kakari-particles in classical Japanese, especially from the viewpoint of the syntactical functions and cognitive processes.

First, in Japanese classical poems, ha-ya chain forms, normally with auxiliary verb “ramu”, function as the forms for explanations of cause and effect relationship. In contrast, ya-ha chain forms function simply as the interrogative sentences. This shows that the order of kakari-particles determines the syntactic structures and functions of the sentences.

Second, in the sentences with “ba-koso”, we can mostly observe the co-occurrence of particle “mo”. This phenomena can be treated as the problem of co-occurrence of particles “koso” and “mo”. As a result of our research, we find that both particles form the particular syntactic construction, where the semantic interactions between “koso” and “mo” can be observed.

Third, we discuss the continuity between chain forms and contrast forms. Although both are quite different forms, in some cases, for example with same pair of kakari-particles, we find very similar cognitive processes on both side.

Finally, we point out that there are co-occurrence patterns of kakari-particles, indicating focus moving. These patterns (transition forms) are used to suggest the movement of viewpoints of narrotor or characters, especially in the tales of Heian period.

Key Words : co-occurrence of kakari-particles, “ba-koso” structure, continuity between chain form and contrast form, focus moving, transition forms

*北陸大学経済経営学部 (学外講師) Faculty of Economics and Management, Hokuriku University (Faculty Extramural)

はじめに

前稿(坂田一浩 2021)では古典日本語における係助詞共起の現象について、その構文機能も含めて概括的な考察を行った。本稿ではこれを承けて紙数の関係上ここでは触れ得なかった共起形式を取り上げつつ、文構成における機能を中心に検討を試み、さらに異なる形式相互の関連のあり方につき、事態認知の表明がいかに行われているかという点から包括的な考察を試みる。

一、共起構文のいくつかの形式に関して

1-1) ハヤおよびヤハ連鎖構文

まずは係助詞共起の連鎖構文の中から、「AはBや」の形式をとるハヤ連鎖構文と、その倒序形式であるヤハ連鎖構文を取り上げる。また必要に応じてカハ連鎖構文にも言及したい。以下、和歌の例を中心としつつ、これらを比較してみる。

まず、ハヤ連鎖構文に関してその構文特性をみるために、1)文末表現、および2)「は」「や」がそれぞれいかなる成分を承けているか、以上の点を八代集についてみてみると、まず1)に関しては全体の56.6%が助動詞「らむ」を文末として取っている。これは和歌における特徴的な傾向である。次に2)についてみるに、

- ①秋はぎの花さきにけり高砂のをのへしかは今やなくらむ (古今 218)
- ②さみだれに春の宮人くるときはほととぎすをやうぐひすにせむ (後撰 166)
- ③いでしより見えずなりにし月影はまた山のはにいりやしにけん (同 693)
- ④よのなかを今はかぎりとおもふには君こひしくやならむとすらむ (後拾遺 986)
- ⑤よをてらす月かくれにしさよなかはあはれやみにやみなまどひけん (同 1182)
- ⑥つねよりも秋の夕べをあはれとは鹿の音にてや思ひそめけん (千載 322)

「や」は時格(①の例)、対格(②)、連用修飾格(④)、あるいは③のような述語分節として用言中に位置するなど、様々な成分を承けているが、「は」は主格を承けるものが全体の7割を占めている。また「は」が主格を承ける場合、それが①③のように単純にモノ、すなわち事物名詞である例も多くみられるが、とりわけ、

- ⑦なみのおとのけさからことにきこゆるは春のしらべやあらたまらむ (古今 456)
- ⑧わが袖にまだきしぐれのふりぬるは君がこころに秋やきぬらむ (同 763)
- ⑨こよひかくながむる袖のつゆけきは月の霜をや秋とみつらむ (後撰 214)
- ⑩濡れつつもくるとみえしは夏引のてびきにたへぬ糸にやありけん (同 976)
- ⑪ほどもなくなつのすずしくなりぬるは人にしられで秋やきぬらん (後拾遺 229)

のように「は」がコト、すなわちある事態を表す準体句を承け、その背景にある要因なり関連事態の存在なりを「や」を含めた以下の述部で推し量る、「事態背景推量文」が多いのは特徴的である。そもそも古典和歌では係助詞「や」それ自体、「らむ」と呼応することが極めて多かった。例えば中世、てにをはの呼応を示した歌、

ぞるこそれおもひきやとははりやらんこれぞ五つのとまりなりける
にも「や・らん」の項目があるように、「や～らむ」の呼応は古来より意識されていたものである。ただここで注意すべきは、今問題としている「事態背景推量文」では、「や～らむ」による疑いや推し量り(思い設けというべきか)の対象となる事態がいかなるものであるかを述べている際に、それが「は」によって提示される、という点であり、ここに「らむ」歌において「は」

「や」による係助詞共起構文があえて用いられる必然性があったと考えられる¹。
また、和歌のハヤ連鎖構文において「は」が主格を承ける例では、準体句を承ける事態背景推量文以外にも、「は」が事物名詞を承ける例において、

A)

- ⑫春霞たつをみすててゆく雁は花なきさとにすみやならへる (古今 31)
- ⑬年ごとに雲ちまどはぬかりがねは心づからや秋をしるらむ (後撰 365)
- ⑭おそくとく色づく山のもみちばはおくれさきだつ露やおくらむ (同 381)
- ⑮ふるさとの霞とびわけ行く雁は旅の空にや春をくらすむ (拾遺 56)
- ⑯さよふかくたびのそらにてなかりはおのが羽風やよさむなるらん (後拾遺 276)

B)

- ⑰年をへて花のかがみとなる水はちりかかるをやくもるといふらむ (古今 44)
- ⑱しらゆきのふりてつもれる山ざとはすむ人さへや思ひきゆらむ (同 328)
- ⑲たちはなれさはべになる春駒はおのがかけをや友とみるらん (後拾遺 46)
- ⑳緑にているもかはらぬ呉竹はよのながきをや秋としるらん (同 1048)
- ㉑さくらさく山田をつくるしづのをはかへすがへすや花を見るらん (金葉 68)

以上挙げた A) B) 諸例のように、当該の名詞が或る事態を描写・説明した比較的長い連体修飾句を伴っている場合が多い。いきおいその体言は、単なる一般的概念というよりも「句的事態」を背後に担うものとなっており、「事態背景推量文」に近いありかたである。実際⑬では、

かりがねの年ごとに雲ちまどはぬは 心づからや秋をしるらむ

と歌の大意を損なわずに事態背景推量文への変換が行えることが、如実にそれを示している(⑫以下、⑯までの A の諸例は全て同様に扱うことができる)。他方、⑰以下の B) の諸例では「は」の前後の関係が「おそくとく色づく山のもみちナレバ おくれさきだつ露やおくらむ」と変換が可能であるように、「は」が承ける体言句中の修飾節が「は」以下で述べられる推量の根拠として機能している(このことは、今仮に修飾節を消去してみると全体の推量が意味をなさないものとなることからわかる)。さらに和歌ではこのような因果関係表明の表現構造が意図的に修辞技法として利用された節がある。例えば⑲では「おそくとく」と「おくれさきだつ」が、⑳では雪の縁で「ふり」と「きゆ」が、また㉑では「山田をつくる」と「(田ヲ)かへすがへす」が、それぞれ「は」の前後に対置されつつ、対語構成、縁語構成をなしており、古典和歌のハヤ連鎖構文では同様の例が散見される²。

いずれにせよ、和歌のハヤ連鎖構文において用例の多数を占める「主格語句+は…や～らむ」の例は、主格語句の形式の違いこそあれ、因果を推し量る構造をその基底にもつのであり、ここでは「や～らむ」の呼応のみならず、「は」によるとりたてて句が論理構成の上で重要な役割を果たしていることが確認されたのである。

次にハヤ連鎖構文について、その構文上の特徴をハヤ連鎖構文との比較を通して確認したい。まず八代集における用例を挙げる。

- ⑳タづくよをぐらの山になく鹿のこゑのうちにや秋はくるらむ (古今 312)
- ㉑鶯のこぞのやどりのふるすとや我には人のつれなかるらむ (同 1046)
- ㉒すみのえの松にたちよる白波のかへるをりにやねはなかるらん (後撰 661)
- ㉓いくよへし磯辺の松ぞ昔より立ち寄る浪や数はしるらん (拾遺 1169)
- ㉔まことにや同じ道にはいりにける一人は西へゆかじとおもふに (後拾遺 1023)
- ㉕まことにやおぼすて山の月はみるよもさらしなと思ふわたりを (同 1091)
- ㉖春のこぬところはなきをしら川のわたりにのみや花はさくらん (詞花 280)
- ㉗澤水にほぐしのかげのうつれるをふたともしとや鹿はみるらん (金葉 146)

ハヤ連鎖構文の場合と同様、「らむ」文末が多くを占め、「は」が主格を承ける例が多くを占めるのであるが(八代集では全 53 例中 22 例である)、「は」が取り立てる語句の文全体におけるあ

りようは両者の間で大きく異なる。すなわち、「事態背景推量文」でみられた準体句の例が確認できず、また事物名詞を「は」が承ける場合、当該名詞は連体修飾語を伴う例が少なく、「秋」「花」「鹿」のごとく二音節の体言の場合が多い。さらにハヤ連鎖構文の「は」がおおむね題目提示の用法であったのに対し、ヤハ連鎖構文では非提題非対比の「は」（これについては尾上 1995 の「額縁的詠嘆」を参照）がその殆どを占める。そもそもヤハ連鎖構文はハヤ連鎖と違い、㉔㉔㉔㉔にみられるように「らむ」文末であっても原因推求となる例は少ないのである。以上の点からみても、ヤハ連鎖がハヤ連鎖構文の単純な倒置でないことは明らかである。

さて、散文においてもハヤ連鎖構文は「は」が主格を承ける例が多く、源氏物語では 65 例中 42 例、枕草子では 12 例中 9 例が「主格+は」である。なかでもとりわけ顕著な傾向は、「～は～にやあらん」の文型が多くみられることであり、これは和歌において原因推求の構文「主格語句+は…や～らむ」が多くを占めていたことと軌を一にするありかたである。

あやしく、かかる世をもとひたまはぬは、このさるまじき御なかのたがひにたれば、ここをもけうとくおぼすにやあらん、かくことのほかなるをも知り給はでと思ひて、（蜻蛉日記・天禄元年六月）

にはかに造らせ給ふときくは、そこにすゑ給へるにや、とおぼすに、（源氏・松風 199）

心なんまだなつきがたきは、見馴れぬ人を知るにやあらん。（同・若菜下 313）

また、薬玉は、菊のをりまであるべきにやあらむ。（枕草子 36 段）

この人のともなる者どもはわびぬにやあらん。（同 174 段）

もしこの、弁・少納言などのもとに、かかるものもてくる下部などは、することやある。

（同 136 段）

その一方でヤハ連鎖構文の例は、散文ではごくわずかし確認できない。例えば源氏物語では全篇を通じて以下に挙げた 2 例しか確認できず、いずれも会話文での例である。

かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂といひける人は、唐土にわたりて、かへりきける時に、舟にのるべきところにて、かの国人、馬のはなむけし、別れをしみて、かしこの漢詩つくりなどしける。（土佐日記 17）

かやうなるや、これにはかなふべからむ。（古今・仮名序）

歌などの文字、いひあやまりてばかりや、かうは呼びかへさむ。（枕草子 32 段）

さてや、ぬれ衣にはなり侍らむ、と啓したれば、（同 224 段）

かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや、おほやけには仕うまつりたうぶ。

（源氏・少女 284）

わりなしや。世にある人の上とてや、問はず語りは聞こえ出でむ。（同・玉鬘 361）

ちなみに、ヤハ連鎖構文と同じく疑問表現の一形式であり、かつ同じく第二項に「は」をとるカハ連鎖構文は、散文でも多くの例が確認できる。

いかでか、中におとりまさりは知らむ。（竹取物語）

などか、人そへてはたまはせざりし。（枕草子 82 段）

などか、さはゆるさせたまふ。（同 94 段）

口惜しのことや。殿上人などのきかむに、いかでか、露をかしきことなくてはあらむ。そのききつらむところにて、きとこそは、よましか。（同 95 段）

などか、いとこよなくは勘じ給へる。（源氏・藤裏葉 177）

いかでかこの御いそぎをよそのこととは聞き過ぐさむ、とおぼして、（同・行幸 77）

さて、いつか女御殿にはまゐり侍らんずる、と（同・常夏 21）

うたた寝は諫めきこゆるものを、などか、いとものはかなきさまにては大殿籠りける。

（同・常夏 16）

とりわけカハ連鎖構文の中でも、ここにいくつか挙げた「不定語+か～指示副詞+は」の型は古

典語では多くみられるが、ここでの「は」は疑問点の強示として機能し、現代語訳では「は」をそのまま残すと不自然なものとなる³。

以上みてきたように、古典語においてハヤ、ヤハ、カハの各連鎖構文は各々独自の意味構造をもちつつ、和歌・散文といった異なる文体間でも機能面で異なる様相をみせているのである。

1-2) 「ばこそ」構文における「も」の共起をめぐる

古典語における、接続助詞「ば」と「こそ」との熟合形「ばこそ」に関してはその構文面での特徴的なふるまいから、これまでもさまざまな考察がなされてきた。その論点を見るに、これらは、後件にしばしば現れるラ変動詞已然形の「あれ」がもつ特殊な表現性の解明を志向したものの（江口正弘 1963・中村幸弘 1977 および 2015、碁石雅利 1987 等）および、本構文の反語としての表現性を問題としたもの（山口堯二 1998）、ほぼこの二点に集約されるように思われる。

ところが古典語における「ばこそ」構文の用例を仔細に検討してみると、その後件には、
つぎねふ 山城女の木鉾持ち打ちし大根 根白の白腕 まかずけばこそ(婆許曾) 知らずとも(母)いはめ (古事記歌謡 58)

玉鉤まき寝る妹もあらばこそ(者許増) 夜の長けくも(毛) うれしかるべき (万葉 2865)
にがりゆく水には影の見えばこそあしまよふ江をとどめてもみめ (後撰 1023)

ちはやぶる神もおもひのあればこそ年へてふじの山ももゆらめ (拾遺 597)

この殿上の墨・筆は、何の盗み隠したるぞ。飯・酒ならばこそ、人もほしがらめ。 (枕草子 103 段)

いとおもりにて、夢にもいはけたる御ふるまひなどのあらばこそ、おのづからほの見え給ふついでもあらめ、心にくき御けはひのみ深さまされば、 (源氏・絵合 172)

並々の人にもあらばこそ、聞き入れでも過ぐさめ、いかにもかく召し寄せらるる面目もおろかならず。 (狭衣物語・巻二)

のように、係助詞「も」を伴っているものが多く見出だされる。そうして全体の表現構造は、「ばこそ」が取り立てるその条件下においてはじめて、「も」とりたて事態が生起する、さらに言えば、「～であるからこそ／あるならこそ、特殊な、あるいは実現困難な A という「も」取り立て事態が生起する」というものである。かくて文全体としては「こそ」と「も」の共起により、因果関係の強さを強調するものとなっている。今、八代集と枕草子の「ばこそ」の用例に関して、「も」および同類の助詞「は」の共起の有無を簡単に表にしてみると、次のようになる（ただし後件に係助詞が共起する余地のない、「ばこそあれ」で終止する用例は除く）。

	「も」と共起	「は」と共起	「も」「は」いずれとも共起なし	計
八代集	12 (7/5)	2 (1/1)	17 (10/7)	31
枕草子	6	0	4	10

表 1) 八代集と枕草子における、「ばこそ」と係助詞「は」「も」の共起
(括弧内の数字は(未然形接続「ば」/已然形接続「ば」)の内訳を示す)

このように、「ばこそ」構文では未然形接続、已然形接続のいずれにおいても高い確率で「も」の共起がみられ、その一方で「は」が出現している例は少ないことが見て取れる。その要因を考えるにあたり、ここでは「ばこそ～も(／は)」の共起を、条件節を承ける「こそ」と「も(／は)」の共起と読み替え、つまりコソ・モの共起構文の問題と捉え直した上で検討を進めてみたい。

今、広く古典語におけるコソ・モ共起構文の用例をあたってみると、八代集、枕草子、源氏物語のいずれにおいても「こそ」が状況を承ける例が少なくとも三分の一以上を占めている。例えば八代集 53 例中 26 例で、また源氏物語のコソモでは 120 例中実に 44 例において、「こそ」が「ばこそ」「てこそ」「からこそ」などの形で条件表現、または時の成分を承けている。そうしてその条件下においてはじめて、「も」とりたて事象が生起する、という文型的意味を示しており、「も」は「こそ」が提示する条件下での、随件事象の提示として機能するという共通の構文特性が見いだされる。

- ①雪降りてとしのくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ (古今 340)
- ②よりにこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔 (源氏・夕顔)
- ③わが宿のさくらはかひもなかりけりあるじからこそ人もみにくれ (後拾遺 102)
- ④思ひしる心のなきをなげくかな憂き身ゆゑこそ人もつらけれ (千載 932)
- ⑤あひがたき法をひろめし聖こそうらみし人もみちびかれけれ (金葉 638)
- ⑥心こそゆくへもしらねみわの山すぎの梢の夕暮の空 (新古今 1327)
- ⑦みちのくのあだちのまゆみきみにこそ思ひためたることもかたらめ (後拾遺 1137)
- ⑧ともにこそ花をもみめとまつ人のこぬものゆゑにをしきはるかな (後撰 138)
- ⑨しばしこそ思ひもいでめつづくにのながらへゆかば今わすれなむ (後拾遺 958)
- ⑩おのがさかしからん時こそいかでもいかでもものし給はめとおもへば、(蜻蛉日記・康保三年三月)
- ⑪講師の顔をつと目守らへたるこそ、その説く言の尊さも、おぼゆれ。(枕草子 30 段)
- ⑫いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせむと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたし、もて騒ぐほどに、こちたう赤き薄様を、唐撫子のいみじう咲きたるにむすびつけて、取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、心ざしのほど、あさからずおしはかられて、かつ使ひつるだに飽かずおぼゆる扇も、うちおかれぬれ。(同 182 段)
- ⑬きよげなる童部の、髪うるはしき、また大きなが、髭はおひたれど、おもはずに髪うるはしき、うちしたたかに、むくつけげに多かるなど、多くて、いとまなう、ここかしこにやむごとなうおぼえあるこそ、法師もあらまほしげなるわざなれ。(同・一本 325 段)
- ⑭かかるこそなかなか身もくるしけれ、とおぼす。(源氏・漣標 110)
- ⑮母方からこそ、みかどの御子もきはぎはにおはすめれ。(同・薄雲 218)

⑯なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強う侍らめ。(同・少女 282)

これらの例で、和歌における①から④、あるいは散文における⑩⑪⑫の諸例のように「こそ」が「て」「から」「ゆゑ」などの条件・原因を表す節を承ける例では「ばこそ・も」の共起例に準じてその表現構造を考察することができる。他方、「こそ」が主格・対格・与格などの事物成分(⑤～⑦の例)や修飾成分(⑧⑨の例)を承ける場合も、今仮に当該の文型を「A こそ α も～」と表すならば、A にしてはじめて「も」とりたて事態の α が成り立ち得る、というように、選択の結果としての一つの状況・場合を設定する中で「も」取り立て事象を想定し、その特定の条件下で初めて成り立つ随件事象を「も」が取り立てる、という表現機構がみてとれる。その意味では「ばこそ」のように「こそ」が状況成分をとりたてる場合と同様である。

そもそも「こそ」自体が本来、大野 1994 などが既に指摘するように「逆接の前提句の構成」、つまり何らかの条件の表明にあずかるものであった。そこへ「も」が共起することで、「ある条件が発動する場合にこのようなこと“も”起こる」というように、それに伴って生起する事象を取り立てる、という方向に動く。そこからさらに進んで、「も」が⑤のように極端例や例外的事象の提示として機能するようになると、「こそ」の拒斥性と映発し合い、「このように限定された条件のもとでは(あるいは限定された条件にしてはじめて)、こういった極端な事例“も”生じ得るのだ」となり、双方の取り立て事象の関連性・必然性が強調されたものとなる⁴。「ばこそ」による条件節を含む文における「も」の共起の頻度の高さは、その一つの現れと考えられる。こ

れをさらに推し進めていけば、「こそ」が強い拒斥性・限定性をもって或る前提条件を提示する一方で、その反作用として、「も」はその場合にのみ生起、あるいは成立しうる事態を多くの暗示事象の中から取り出す—それはまた特殊な、あるいは極端な事例となり得るのだが—ここにおいて「こそ」による強い拒斥性と、その反作用としての、あらゆる極端例をも含みうる「も」の包含性は、互いに映発し合う形で却って意味上緊密に結合し、一つの構文を形成するのである。これが「こそ」「も」の共起しやすさを支える原理であるとみることができよう。

ここで表 1) の問題に立ち返って、「ばこそ」構文においてなぜ「は」よりも「も」がより多くの共起事例を持つのかという点に関して、ここでもコソ・モ、コソ・ハという二つの係助詞共起構文の問題に読み替えることによって、その要因を考えてみたい。まずはコソ・ハ連鎖構文の用例を挙げる。

かたみこそ今はあなたれこれなくはわするる時もあらましものを (古今 746)

あかてこそおもはむなかははなれなめそをだにのちのわすれがたみに (同 717)

はちすばのうへはつれなきうらにこそものあらがひはつくといふなれ (後撰 903)

松の上に鳴く鶯の声をこそはつねの日とはいふべかりけれ (拾遺 22)

深さこそふぢのたもとほまさるらめ涙は同じいろにこそしめ (後拾遺 580)

旅寝する須磨の浦路のさよ千鳥声こそ袖の波はかけけれ (千載 536)

さるうちに今やけふやとまたるる命、やうやう月たちて日もゆけば、さればよ、よも死なじものを、さいはひある人こそ命はつづむれと思ふに、うべもなく九月もたちぬ。(蜻蛉日記・天禄三年十月)

なほあはれがられてふるひなき出でたりしこそ、よに知らずをかしくあはれなりしか。人などこそ、人にいはれて泣きなどはすれ。(枕草子 6 段)

蠅こそ、にくきものうちに入れつべく、愛敬なきものはあれ。(同 40 段)

おのがじしうらめしき折々、待ち顔ならむ夕暮などのこそ、みどころはあらめ。(源氏・帚木 33)

言に出でては、何かは数への中には聞こえ給はむ。我に並び給へるこそ君はおほけなけれ、となむ戯れ聞こえ給ふ。(同・玉鬘 352)

ひとまずコソ・ハ連鎖構文に関して、「こそ」がどのような成分を承けているかをみるに、条件表現や時を表す語など、状況成分を承けている例は八代集では 54 例中 11 例で全体の約五分の一、他方源氏物語では全 71 例中 4 例と全体の 6%にとどまり、さきに示したコソ・モの数値では、いずれの資料においても少なくとも三分の一以上が状況成分で占められていたのとは大きな傾向の違いを示している。そもそもコソ・ハは上の例からも窺えるように、「こそ」が事人物をとりたて、それを主格とした評価文となる例が散文、特に枕草子では多い。

以上のことから、コソ・モはコソ・ハに比べ、条件表現との親和性が高いといえ、これが条件表現の「ば」を含む「ばこそ」構文において「も」の共起が多い一因といえよう。

さて、コソ・モ、コソ・ハの機能面での特徴として今一つ、コソ・ハにおける「は」は当該の文章・談話における既出の事象かつ主要なトピックを承けるのに対して、コソ・モの「も」は想定外の、思いもよらなかった事象をひよいと引き合いに出してくる、といった傾向の違いがある。これは特に、院政期以降の歌学書・歌合判詞・物語評論・歴史物語などの、論評・論難を交えた文章において顕著となる。

詩には切韻といふものありて、その韻にいりぬれば、その韻のもじどもをつくればこそ、まことに韻といふ事は申すことなれ。歌にはただかみの句のをはりの字、しもの句のをはりの字のなにとなんあるなどこそ申すを、詩の韻になずらへて、はてのもじの事いはんとて、韻の字のなと申すばかりにこそあるを、(古来風体抄 350)

ここでは、コソ・ハの「は」が承ける「韻といふ事」は前に「切韻」「その韻」の語が見られることから、ここでの主要なトピックであることは明らかである。また、

静縁法師、みづからが歌を語りて云、

鹿の音をきくに我さへなかれぬる谷の庵はすみうかりけり
とこそつかうまつりて侍れ。これいかが侍る、と云ふ。予云、よろしく侍り、但、なかれぬ
るといふ詞こそ、あまりにこけすぎて、いかにぞやきこえ侍れ、といふを、静縁云、其詞を
こそ此の歌の詮とは思う給ふるに、この難はことのほかにおぼえ侍り、とて、いみじうわろ
く難ずとおもひげにてさりぬ。・・・さはいへども、大夫公のもとにゆきてこそ、我ひがご
とを思ふか、人のあしく難じ給ふか、ことをばきらめと思ひて、ゆきて語り侍りしかど、
(無名抄 66)

この例において「此の歌の詮」「我ひがごを思ふか、人のあしく難じ給ふか、ことを」はいず
れも話者にとっての関心の焦点、中心となるテーマとなっている⁵。さらに、大鏡ではコソ・ハ
連鎖構文の頻用が一つの文体的特徴ともなっているのであるが、

- ①おもひかけぬに、此院はむかせ給へりしに、あやしとはみたてまつりしものを、とこ
そ、入道殿はおほせらるなれ。 (大鏡・三条院 53)
- ②先祖の御ものはなにもほしけれど、小一条のみなん要に侍らぬ。人は子うみ、死なむが
れうにこそ家もほしきに、さやうのをりほかへわたらん所は、なににかはせん。又、おほ
よそ、常にたゆみなくおそろしとこそ、この入道殿はおほせらるなれ。 (同・忠平 95)
- ③むげのその道、なべての下臈などにこそ、かやうなることはせさせ給はめ、と、殿をも
そしりまうす人々ありけり。 (同・実頼 101)
- ④山の所司、殿の御隨身ども、人はらひののしりて、戒壇にのぼらせたまひけるほどこそ、
入道殿はえ見たてまつらせたまはざりけれ。御みづからは、本意なくかたはらいたしとおぼ
したりけり。 (同・道長 307)
- ⑤太政大臣は、このみかどの御世に、たはやすくおかせ給はざりけり。あるいはみかどの御
祖父、あるいは御舅ぞなりたまひける。(中略)また、卅九代にあたり給ふみかど天智天皇
こそは、はじめて太政大臣をばなしたまひけれ。 (同・大臣列伝序 61)

これらの例において「は」が人物・事態を承ける場合、「この」「かよう」などの指示詞が典型的
に示すように多くが前文において既出のものである。このことは大鏡の歴史叙述のありかたを
考える上でも注目し値する⁶。

また、無名草子では多くのコソ・モ連鎖構文が確認されるが、

- かかる人もちてこそ、死なむ命もいみじからめ、とおぼゆ。 (無名草子 50)
本にむかひてこそ、いみじきこともあはれなることもおぼゆれ、そらにはいときこえにくく
こそはべれ。 (同 58)
- また、憎くはなきほどなる人柄、やむごとくなくなど持ちて、法師になりたらむをり嘆かせみ
むこそ、今少しあはれもまさめ。 (同 90)
- 源氏の宮こそ、いとみじげなる人の、いとかたびかしくなどもなけれ。少しものなど思へ
るこそ、人は心ぐるしきふしにてあれ。 (同 60)

これらのように、「も」は人の意表をつくような事象を取り立てている場合が多いのである。

以上をまとめると、次のようになるかと思われる。

コソ・ハ連鎖・・・「こそ」は事物成分を承けることが多く、全体としては評価の構文に傾く。
また「は」によってそのとりたて事象を正面から見据える。当然こういうことは起こり得る、
ということをも前提に叙述する。

コソ・モ連鎖・・・「こそ」は条件句などの状況を限定する成分を承けることが多く、他方「も」
に関してはそのとりたて事象に対して、やや気を変えて脇から眺める形で目を転じて、このよ
うな状況下では意外にもこのような(ある意味極端な)事態も関連して起こるのだ、という事
態の捉え方を示す。

二、連鎖構文と照応構文との連続性

筆者は前稿（坂田 2021）において、係助詞共起構文を連鎖構文と照応構文の二つに大別し、それぞれについて個別に検討を試みたが、同一の係助詞の組み合わせが連鎖構文、照応構文の双方においてみられるケースはごく一般的である。この場合、助詞の出現順序も同一であれば、それを目で読む、あるいは耳で聞いた場合に理解主体が受ける印象は双方でかなり似通ったものとなる。今これを電場の現象に准えるならば、最初に目、あるいは耳に触れた係助詞がまず理解主体に印象づけられ、話題の場がいったんそれによって「帯電」する。そうして次に接する係助詞は、その先行係助詞によってすでに帯電がなされた環境の中でその含みを読み取ることとなるのである。以上のことを「は」と「ぞ」による共起構文を例にして述べるならば、例えば、

- A1) みやまには松の雪だに消えなくにみやこはのべの若菜つみけり （古今 19）
- B1) かきくらし雪はふりつつしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく （後撰 33）
- C1) 春たてど花もにはほはぬ山里はものうかるねに鶯ぞなく （古今 15）
- A2) つくばねのこのもかのもに蔭はあれどきみがみかげにますかげはなし （古今 1095）
- B2) あしひきのこなたかなたに道はあれど都へいざといふ人ぞなき （新古今 1688）
- C2) あられふるみ山の里のわびしきはきてたはやすくとふ人ぞなき （後撰 469）

これらの各組み合わせにおいて、Aの系列はハ・ハ照応構文、Bはハ・ゾ照応構文、そしてCはそれぞれハ・ゾ連鎖構文であるが、各組を順に眺めていくと、Aではそれぞれの「は」取立て句が比較的对等の資格で対比されているのに対し、Bでは「は」「ぞ」取立て句が接続助詞のはたらきによって対照させられながらも、表現の重点は「ぞ」の方にあり、「ぞ」取立て成分への焦点化がなされている。さらにCになると「ぞ」取立て句に表現上の焦点があるのはBと同様であるが、そこでの「は」取立て句はそれと対立するものではなく、両者は場所（「山里」「み山の里」）とそこに存在する事物（「鶯」「人」）というように、認識上包含関係にあるとってよいものである。その一方でBの類型においても、「は」にはそれぞれ場の提示の働きがみられ（B1では「鶯ぞなく」の背景となる状況である降雪を、またB2では「人」が移動する場としての道を、「は」がそれぞれ提示している）、この点でも両類型における通有性が窺われるのである。

さてこのように見てくると、ハ・ハ照応構文からハゾ連鎖構文への移りにおいて、

ハ・ハ＝対等照応 → ハ・ゾ＝非対等照応（一方の焦点化） → ハゾ連鎖＝包含関係

上のような両助詞の取り立て対象相互の関係性の変化と連続性が見出されるのであり、このようなあり方はまた、次のように図解できるのである。

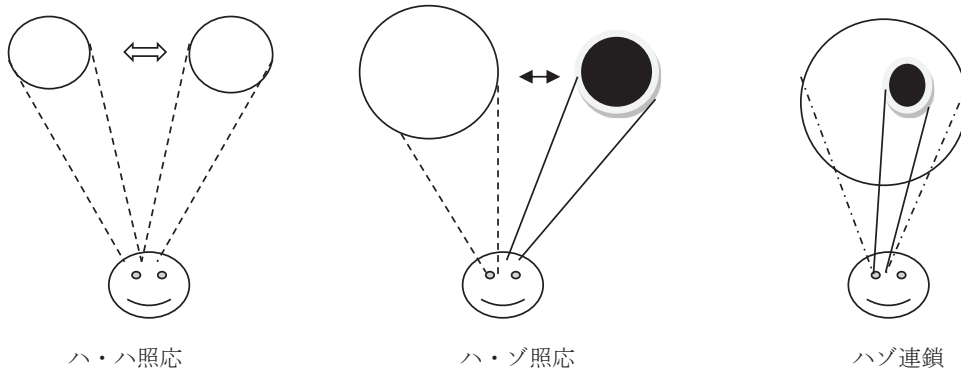


図1) ハ・ハ、ハ・ゾ照応とハゾ連鎖構文における認知モデル

ここではこのような形式につき、これまで取り上げてきた二項形式との比較を通して、その特徴を明らかにしてみたい。今回は、

- ・ハハゾとハゾハ
- ・ハモゾとモハゾ
- ・コソ・モ・ハ

以上五つの共起形式を取り上げ、出現順序の入れ替わりによって「は」「も」の意味発動にどのような影響があるか、という点についてもみてゆく。まずハハゾ連鎖構文の例を挙げる。

- ①時すぎてかれゆくをの浅茅には今はおもひぞたえずもえける (古今 790)
- ②かざごしのみねのうへにてみる時は雲はふもとのものにぞありける (詞花 386)
- ③君が代は天の香久山いづる日のてらんかぎりはつきじとぞおもふ (千載 609)
- ④空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞ侍る。 (源氏・明石 73)
- ⑤丹波の守の北の方をば、宮・殿などのわたりには、匡衡衛門とぞいひ侍る。 (紫式部日記 72)
- ⑥鶯は、詩などにもめでたきものにつくり、声よりはじめて、さまかたちも、さばかりあてにうつくしきほどよりは、九重のうちになかぬぞ、いとわろき。 (枕草子 38 段)
- ⑦をのこは、なほ若きほどは、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、いねぶたからむと見ゆ。 (同 50 段)

ハハゾのうち一番目の「は」(は 1) は題目提示、二番目の「は」(は 2) が対比となっている例が全体の半数以上を占める(この点は現代語の「は」の連用に関して久野 1973 が述べるところと一致する)。ただその一方で、②④のように「は 1」が時を限定する成分を承ける例では、今度は「は 1」に対比の含みが強く感じられ、「は 2」が題目提示となって以下の「ぞ」とハゾ連鎖構文を形成している例が多くみられる。

これに対してハゾハ連鎖では、

- 唐衣ひもゆふぐれになる時はかへすがへすぞ人はこひしき (古今 515)
- ねてもみゆねでもみえけりおほかたはうつせみのよぞゆめにはありける (古今 833)
- 春の日のかげそふ池の鏡にはやなぎのまゆぞまづはみえける (後撰 94)
- あひみてもつつむ思ひのわびしきは人まにのみぞねはなかれける (後撰 790)
- 難波づはくらめにのみぞ舟は着くあしたの風のさだめなければ (拾遺 406)
- あしぎぬはさけからみてぞ人は着るひろや足らぬと思ふなるべし (拾遺 408)
- いつしかと君にとおもひし若菜をばのりのためにぞけふはつみつる (拾遺 1338)
- あまのかは空にきこえしふなでには我ぞまさりてけさはかなしき (新古今 873)
- 日ごろこもりたるに、昼は、すこしのどやかにぞ、はやくはありし。(枕草子 116 段)
- すけただは、木工の允にてぞ蔵人にはなりたる。(同 230 段)

ここに挙げた諸例にみられるように、おしなべて「は 1」は題目提示であるが、「は 2」は非提題非対比の「は」となっている。これは「は 1」「は 2」の中間に「ぞ」が位置することにより、先行する「は 1」とはハゾ連鎖構文を、一方後続の「は 2」とはゾハ連鎖構文を形成する場合と同様の原理が働いたことによるものと考えられる(これについては坂田 2021 を参照)。すなわち全体としてみれば、ハゾハは、中間に位置する「ぞ」を媒介項として、ハゾ連鎖とゾハ連鎖が縮約・熟合された形となっている。

このようにハハゾ・ハゾハ両連鎖構文では二項形式ハハ、ハゾに「ぞ」や対比の「は」が上接、下接するか、あるいは二つの二項形式が共通項を介して縮約が起こった、という形成過程が想定される。

次にモハゾの三項形式(モハ+xの場合も)では、基本的にモハ連鎖構文においてみられた逆事態構成はそのままだ(すなわち意外の「も」+対比限定の「は」による逆態構成)、三項目の「ぞ」(あるいは他の係助詞)が述語分節などにより、述部のとりたてとしてはたらく場合が多い。

おとにのみききこし三輪の山よりも杉のかずをばわれぞ見えまし (後撰 625)

行末も子の日の松のためしには君がちとせをひかむとぞ思ふ (拾遺 290)

長き夜も人をつらしとおもふにはねなくにあくるものにぞありける (同 799)

よそなりし雲の上にてみるときも秋の月にはあかずぞありける (後拾遺 255)

年をへてなれたる人も別れにし去年は今年の今日にぞありける (同 586)

しのめのあけゆく空もかへるさは涙にくるるものにぞありける (金葉 423)

神山の松ふく風のもけふよりは色はかはらでおとぞ身にしむ (千載 232)

しきしのぶとこだにたへぬ涙にも恋はくちせぬものにぞありける (同 942)

いと長き人も、ひたひ髪はすこし短うぞあめるを。(源氏・葵 298)

紀伊の守といひしも、いまは河内の守にぞなりにける。そのおとうとの右近のぞう解けて御供に下りしをぞとりわきてなし出で給ひければ、それにぞたれも思ひ知りて、(同・関屋 161)

かたはらなる子どもの心ちにも、親の昼寝したるほどは、よりどころなく、すさまじうぞあるかし。(枕草子 22 段)

人の女・やむごとなき所々に、御文などきこえたまふ人も、今日は、心ことにぞなまめかしき。(同 36 段)

おなじ人ながらも、心ざしあるをりと変わりたるをりは、まことにこと人とぞおぼゆる。(同 68 段)

一方、ハモゾの連鎖に関してはどうかであろうか。こちらもモハヅの場合と同様、ハモ連鎖構文の文型的意味を変えることなく、「ぞ」を下接したものと捉えることができそうだが、はたしてそうか。

やどりして春のやまべにねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける (古今 117)

こひこひてあはむと思ふ夕暮はたなばたつめもかくぞあるらし (後撰 231)

いりぬとて人のいそぎし月かげはいでてのちもひさしくぞみし (後拾遺 859)

住む人のかれゆく宿はときわかず草木も秋のいろにぞありける (同 917)

身のうさはすぎぬるかたを思ふにもいまゆくすゑのことぞかなしき (詞花 340)

梅が枝に降りつむ雪はうぐいすの羽風にちるも花かとぞみる (千載 17)

橋のにほふあたりのうたたねは夢も昔の袖のかぞする (新古今 245)

御前にさぶらふ物は、御琴も御笛も、みなめづらしき名つきてぞある。(枕草子 89 段)

所の衆の、青色に白襲をけしきばかりひきかけたるは、卯の花の垣根ちかうおぼえて、ほととぎすもかげにかくれぬべくぞ見ゆるかし。(同 208 段)

雨は、心もなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいと憎くぞある。(同 277 段)

そもそもハモ連鎖構文では、

故郷は(者)遠くも(毛)あらず一重山こゆるがからにおもひぞ吾がせし (万葉 1038)

あだ人のたむけに折れる桜花あふ坂までは散らずもあらなん (後撰 1305)

御かへりには「山の住まひは、秋のけしきも見給へんとせしに、またうき時のやすらひにて中空になん。しげさは知る人もなしとこそ思う給へしか。(以下略)」(蜻蛉日記・天禄二年七月)

なほ、さりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ、世のありさまも見せならはさまほしう、典侍などにてしばしもあらせばや。(枕草子 21 段)

のように「も」は文末の打消・意志・願望などの陳述との強い結びつきを示すもの(陳述依存)が少なくとも六割以上を占める。ところが上掲のハモゾ連鎖の例を見るに、「は」は題目提示として機能している一方、「も」はハモ連鎖の場合と異なり文末陳述との関連の希薄な用法(沼田 1986 のいう「単純他者肯定」「意外」の用法)が半数以上を占め、その一方で陳述依存の用法は、八代集では 27 例中 8 例にとどまっている。このようにハモ連鎖構文と比較して明らかに

「も」のあり方が異なっているのは、ハモゾ連鎖構文では文末表現に強い規制力を有する「ぞ」の出現により、他方の共起係助詞「も」が文末表現と呼応しにくくなったためと考えられる。

このように両者で「も」の意味用法の傾向が大きく異なるにも関わらず、ハモゾ連鎖はハモ連鎖に「ぞ」が下接したものと捉える方が自然なのは、ハモ連鎖においても、

かく恋ひむものとは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける (古今 700)

秋はなほ木のしたかげもくらかりき月は冬こそ見るべかりけれ (詞花 148)

以上のように非陳述依存の「も」の用法をしめす例が存在すること、また「は」「も」それぞれが承ける成分の意味的關係がハモゾ連鎖と極めて近い例が多いことによるものである。さらに今一つの可能性として、ハモゾ連鎖構文はモゾ連鎖構文に「は」が上接したものととも考えられるのだが、そのモゾ連鎖では

ささのはにおくしもよりもひとりぬるわが衣手ぞさえまさりける (古今 563)

なるとよりさしいだされし舟よりもわれぞよるべもなき心ちせし (後撰 651)

これらのように、とりわけ和歌においては比較構文をとる例が多く、ハモゾ連鎖の文型的傾向とは明らかに異なるのである。

最後に、コソ・モ・ハ連鎖構文についてみておきたい。まず例を挙げる。

⑧夢のうちにあふとみえつる寝覚めこそつれなきよりも袖は濡れけれ (新古今 1127)

⑨受領したる人の宰相になりたるこそ、もとの君達のなりあがりたるよりも、したり顔にけだかう、いみじうは思ひためれ。(枕草子 180 段)

⑩錦木に書きそへてこそことのはも思ひそめつる色は見ゆらめ (六百番歌合 609 歌)

⑪「おほやけに仕うまつりし際は、羽を並べたる数にも思ひはべらで、うれしき御かへりみをこそ、はかばかしからぬ身にて、かかる位におよび侍りておほやけに仕うまつりはべることに添へても、思うたまへ知らぬにははべらぬを、齢の積りには、げにおのづからうちゆるぶことのみなむ多く侍りける、など (源氏・行幸 72)

⑫かの院こそ、なかなかなほ、いかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は、絶えずものせさせたまふなれ、その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前齋院などを今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ、と申す。(同・若菜上 214)

⑬心ぐるしき御なやみを、身にかふばかり嘆き聞こえさせ侍るも、何のゆゑにか。かたじけなけれど、ものをおぼしる御ありさまなど、はればれしき方にも見たてまつりなほし給ふまでは、たひらかにすぐし給はむこそたが御ためにもたのもしきことにははべらめと、おしはかりきこえさするによりなむ。(同・夕霧 93)

⑭松の葉をすきてつとむる山ぶしだに、いける身のすてがたきによりてこそ、仏の御をしへをも、道々わかれてはおこなひなすなれ、などやうの、よからぬことを聞こえしらせ、わかき御心どもみだれ給ひぬべきことおほく侍るめれど、たわむべくものしたまはず、中の宮をなむ、いかで人めかしくもあつかひなしたてまつらむ、と思ひきこえ給ふべかめる。(同・総角 387)

⑮よくよく心をすまして、その一境にいりふしてこそ稀にもよまる事は侍れ。(毎月抄 128)

今これらの例で「こそ」「も」「は」各々が取り立てている語句相互の関係をみるに、「こそ」が提示している事物事態に対し、「も」は極端例の提示(⑧⑨のように比較項の「より」を承ける場合。また⑫⑬の例でそれぞれ、「いかなるにつけても」「たが御ために」と不定語を承けているのは、不定語が全ての場合を想定し、極端例の提示の最たるものとなっているからである)や、ふと思いついた事例(⑪)をとりたて、他方「は」は非提題非対比で、⑫の「人をゆかしく思したる心」のように、ここでのメインのトピックをとりたて、あるいは⑩⑬のようにとりたて事態を表現主体が心の中で改めて確認するといった趣がある。また、⑩について全体の表現構造をみると、『錦木に書きそへ』という条件のもとではじめて『ことのは(二)も』かくかくの事態が起

くる」と、「こそ」「も」の共起により各々のとりたて事態の、因果を主とした関係性の強さを強調するものとなっている。そうしてここでの「は」は、その場合に必然的に生起し得るとみなされた事態のとりたてにあずかるものとなっているのである。ここで注意されるのは、前節でコソ・モ、コソ・ハの連鎖について述べた際の、「も」「は」のあり方に極めて近いという点であり、このことはコソ・モ・ハ連鎖構文が、コソ・モとコソ・ハの両連鎖構文を、「こそ」の共通項を介して縮約した形となっているのではないかということ容易に推定させる。

ここでなぜ、コソ・モ・ハ連鎖構文における「も」「は」が今述べたような意味用法をとる傾向にあるのか、その要因について考えてみると、まず「こそ」が先行することで、次に現れる「も」はコソ・モ連鎖と同じ原理で極端・意外な事例を挙げる用法に傾く。そこへさらに「は」が続いた場合、先行係助詞の作用により題目提示の用法とはなり得ず、さりとてモハ連鎖の「は」に見られたような対比の含みも帯びないのは(コソ+モ・ハと分解すればモハ連鎖に準じて捉えることも一応は可能なはずである)、「こそ」の先行により、コソ・ハ連鎖に見られたのと同様の意味発動が「は」に働いたからだ、とみるのが最も自然なように思われる。

このようにみえてくると、コソ・モ・ハ連鎖はコソ・モとコソ・ハが「こそ」の共通項を介して縮約された形となっており、これらはあたかもベクトルの合成・分解のごとき関係にあるとみることができる。すなわち、二つの二項形式の共通項が頭括的に括り出された形で成り立っているのが、コソ・モ・ハ連鎖構文の基底にある表現構造であると考えられる。

以上、五つの三項形式を見てきたが、これらは、二項形式に単一の係助詞が上接あるいは下接する形で付加したものと、二つの二項形式が共通項を媒介として縮約熟合したとみられるものと大きく分けられる。このことを簡単にまとめると次のようになる⁸。

(付加型)

- a) $XY+Z \Rightarrow XYZ$ (ハモゾ連鎖、モハゾ連鎖と、ハハゾ連鎖の大部分)
- b) $X+YZ \Rightarrow XYZ$ (ハハゾ連鎖の一部)

(縮約型)

- c) $\underline{XY}+\underline{YZ} \Rightarrow XYZ$ (ハゾハ連鎖)
- d) $\underline{XY}+\underline{XZ} \Rightarrow XYZ$ (コソ・モ・ハ連鎖)

四、係助詞共起の「転移式」

前稿では係助詞共起構文において、共起係助詞の文構成における関係性から、連鎖と照応という二つの類型の存在を確認した。しかし考察を進めていくと、今一つの類型を認める必要がありそうである。ここに一つの例を挙げる。

三月のつごもりなれば、京の花盛りはみなすぎにけり、山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするまに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひ給はず、とるせき御身にて、めづらしうおぼされけり。寺のさまもいとあはれなり。峰高く深き岩の中にぞ聖入りみたりける。(源氏・若紫 152)

有名な若紫垣間見のくだりだが、ここでの係助詞の現れ方を見ると、「は⇒も⇒ぞ」と、あたかも助詞が次々に移り変わって、最終的に「ぞ」に落ち着くかのような振る舞いをみせており、しかもこの出現順序は、叙述上必然性のあるもののように思える。すなわち、「は」によってまず季節の景物である「花」を提示し(さらに「京の花」と「山の桜」が「は」によって対比されている)、次に「も」によって脇の事象である霞と寺に目をやり、最後に「ぞ」で焦点を絞り込むかのように、今後の展開で重要な人物となる「聖」にスポットを当てる、このような表現機構を見て取るべきかと考えられる。映画などのカメラワークでいえば、まず眼前の或る景物にレンズを向け(「は」の機能)、次に脇の事物にカメラを振り(「も」)、そうして最終的な焦点となる

事象にズームで迫っていく(「ぞ」というあり方にも准えられるもののように思われるのである。

こう考えてみると、「は⇒も⇒ぞ」転移の形式は事態描写における視点の移動を反映したものとみられ、特に物語文の場合、あるいは物語絵の説明における語りの視点が投影されたものではないか、との推測も成り立ちそうである。もっともこれについては現存の絵巻物類をもとにした検証も不可能に近く、また源氏物語の場合、執筆にあたっての物語絵の影響・交渉をどう考えるかという複雑な問題もあるので、今は立ち入った言及は控えることとしたい。

ちなみに、「は⇒も⇒ぞ(なむ)」転移による同様の行文は、源氏物語では他に少なくとも 24 例確認できる。以下、比較的集中して現れる若菜巻以降のものをいくつか挙げてみる。

①上達部も、大臣二所をおきたてまつりては、みな仕うまつり給ふ。舞人は、衛府のすけどもの、かたちきよげに丈だちひとしきかぎりを選らせ給ふ。この選ひに入らぬをば、はちにうれへ嘆きたるすきものどもありけり。陪従も、石清水、賀茂の臨時の祭りなどに召す人々の、道々のことにすぐれたるかぎりをととのへさせ給へり。加はりたる二人なむ、近衛府の名高きかぎりを召したりける。御神樂の方には、いと多く仕うまつれり。(若菜下 322)

②ほのぼのと明けゆくに、霜はいよいよふかくて、本末もただどしきまで酔ひすぎにたる神樂おもてども、おのが顔をば知らで、おもしろきことに心はしみて、庭火も影しめりたるに、なほ、万歳万歳と、榊葉を取り返しつつ祝ひきこゆる御世の末、思ひやるぞいとどしきや。(若菜下 326)

③中宮はまゐり給ひなむとするを、いましばしは御覽ぜよとも聞こえまほしうおぼせども、さかしきやうにもあり、内の御使のひまなきもわづらはしければ、さも聞こえ給はぬに、あなたにもえ渡り給はねば、宮ぞわたり給ひける。(御法 169)

④この君はまだしきに世のおぼえいと過ぎて、思ひあがりたることよなくなどぞものし給ふ。げにさるべくて、いとこの世の人とはつくり出でざりける、仮に宿れるか、ともみゆることそひ給へり。顔かたちも、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらとみゆる所もなきが、ただいとなまめかしうはづかしげに、心の奥おほかりげなるけはひの、人に似ぬなりけり。香のかうばしきぞ、この世のにほひならず、あやしきまで、うちふるまひ給へるあたり、とほくへだたるほどのおひ風に、まことに百歩の外もかほりぬべき心ちしける。(匂宮 218)

⑤みづからの御うへは、かくそこはかとなくもてけちてはづかしげなるに、すがすがともえのたまひよらで、宮の御ことをぞまめやかにきこえ給ふ。(総角 384)

⑥けざやかにいとものとほくすくみたるさまには見え給はねど、今やうのわか人たちのやうに、艶げにももてなきて、いとめやすくのどかなる心ばへならむとぞ、おしはかられ給ふ人の御けはひなる。(椎本 370)

いずれも係助詞によって表される描写の焦点が、次々に転じられ移り行く、といった構造をもっている。今これを、これまでみてきた連鎖式、照応式と対応させる形で新たに転移式と名付けることとしたい。なお源氏物語で確認されたこのようなハ・モ・ゾの転移式は、先行する作品では蜻蛉日記の以下の例が比較的早いものようである。

⑦道はことにをかしくもあらざりつ。もみちもまだし、花もみな失せにたり。枯れたる薄ばかりぞ見えつる。(蜻蛉日記・安元元年九月)

⑧西の宮は、ながされたまひて三日といふに、かき払ひ焼けにしかば、北の方、わが御殿の桃園なるにわたりて、いみじげにながめたまふときくにも、いみじうかなしく、わが心ちのさはやかにもならねば、つくづくと臥して思ひあつむることぞ、あいなきまでおほかるを、書き出だしたれば、いとみぐるしけれど、(同・安和二年六月)

⑨司召、廿五日に、大納言になどののしれど、わがためはましてところせきにこそあらめと思へば、御よろこびなど言ひおこする人も、かへりては弄ずる心ちして、ゆめうれしからず。大夫ばかりぞえもいはず下には思ふべかめる。(同・天禄三年一月)

以上みてきたハ・モ・ゾ転移式の認知プロセスのありようを簡単な模式図で示すと、下の左の図のようになる。

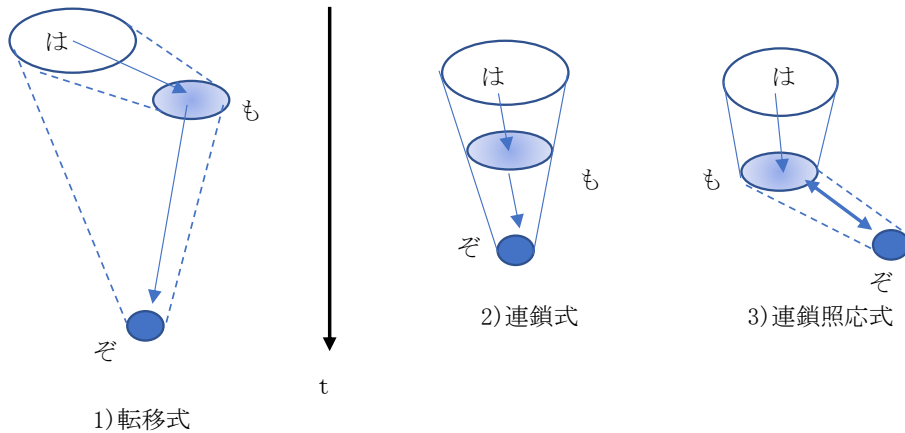


図2) ハモゾによる転移、連鎖、連鎖照応の各形式における認知構造の模式図

図中、転移式の右脇の矢印 t は時間軸を表し、したがって全体の図は、時間の流れに沿って「は」「も」「ぞ」それぞれのとりたて項へと表現主体の意識の焦点が転移してゆく過程を示している。起承転結にも似た表現構造がここには窺えるのである。

ところで、同じく「は、も、ぞ」の三係助詞によって構成された共起構文として、前節で取り上げたハモゾ連鎖式と、下に挙げたようなハモ・ゾの連鎖照応構文がある。前者においてはそれぞれの係助詞が一つの事象についての叙述にあずかるのに対し、後者では、ハモ連鎖の部分がある一つの事象についての叙述をなし(下の例⑬では「姫君」)、ゾはそれとは別の事象(⑬では「中の君」)を取り立ててハモ連鎖の部分と照応している。これがハモゾ転移式になると、「は、も、ぞ」それぞれが別個の事象を述べ立て、それが文全体として関連した叙述となっている。今連鎖式、連鎖照応式における認知プロセスを、転移式と同様に模式的に示すと上掲、図2)の2)3)のようになる。なお図中、それぞれの円を結ぶ実線は、互いの円が或る一つの事象に関するとりたてであることを、また破線は、それが繋ぐ円が相互に他事象をとりたてていることを示している。

⑪その中に、後見などあるはさる方にも思ひ譲り侍り、三宮なむ、いはけなき齢にて、
(中略) といとうしろめたくなしく侍る、と、 (源氏・若菜上 208)

⑫やむごとなきだに、おぼすさまにもあらざる世に、ましてたちまじるべきおぼえにしあらねば、すべていまはうらめしきふしもなし。ただかの絶えこもりにたる山住みを、思ひやるのみぞあはれにおぼつかなき。 (同・若菜上 290)

⑬姫君をばさらにただのさまにもおぼしおきて給はず、中の君をなむ、いますこし世の間こえかるがるしからぬほどにならずひならば、さもやとおぼしける。 (同・竹河 255)

以上見てきた「は、も、ぞ」による三つの共起形式は、上述の通り各々の係助詞がとりたてた事象の異同によって一応は区別されるのであるが、実際の用例では互いにかなり近いありかたを示すものが多い。例えば下に挙げるものはハモゾの連鎖式であるが、限りなく転移式に近いものとなっており、両者の通有性が窺えるのである。

まづ歌をよまむ人は、ことにふれて情をさきとして、もののあはれをしり、つねに心をすまして、花のちり、木の葉のおつるをも、露しぐれ、色かはるをりふしをも、目にも心にもとどめて、歌の風情をたちみにつけて、心をかきべきにてぞ候ふらむ。 (夜の鶴)

まとめにかえて

今回は特に、前稿（坂田 2021）で個別に論じた問題の間に関連性を見いだすことで、論点をさらに掘り下げることを主眼とした。連鎖式と照応式の連続性、三項形式、転移式など、いずれもこのような視座からのものである。ただ紙数の関係で論証が十分でない点も多く、掲出の資料も特定のジャンルへの偏りがあることは否めない。今後はこの点を補いつつ、さらに考察を進めていきたいと思う。

付記）本稿で引用した諸作品の本文は、万葉集・八代集・竹取物語・蜻蛉日記・枕草子・源氏物語・六百番歌合はすべて岩波の新大系本に、古来風体抄、無名抄、後鳥羽院御口伝、夜の鶴等の歌学書は日本歌学大系本に、また古事記・大鏡は小学館の新編全集本に、無名草子は新潮の古典集成本に、それぞれ拠った。なお、引用末尾の作品名に付した洋数字は、それぞれの書籍における頁数を示す。

注

¹ ちなみに野村 1997 も三代集のラム歌を分類する過程で「…ハ…ヤ・原因句・ラム」の構文形式の存在を指摘するが、らむの用法そのものの解明に主眼を置いている点で本稿とは視点が異なる。また本稿の「事態背景推量文」に関しては、森重 1967 に「結果帰結からその原因理由を求めた構成のもの」（203 頁）として、いくつかの例が挙げられている。

² これはモハ連鎖構文で

さばへなる荒ぶる神もおしなべて今日はなごしの祓なりけり （拾遺 134）

夕月夜ほのめくかげも卯の花の咲けるわたりはさやけかりけり （千載 140）

しののめの明けゆく空もかへるには涙にくるるものにぞありける （金葉 423）

「も」が承ける体言の修飾句と述部とにそれぞれ、「荒ぶる」と「なごし（和し）」、「ほのめく」と「さやけし」、「明けゆく」と「くるる」という対語が対置されている構造に極めて近いありかたである（これについての詳細は坂田 2003 を参照のこと）。古典和歌では係助詞共起による句の形成が、修辞技法とも密接に関わる、あるいは場合によっては修辞を成り立たせる一つの原理として機能していることを端的に示す例であろう。ついでながら本文に挙げた⑱⑳は互いに類歌の関係にある。

³ 例えば本文に挙げた枕草子の例、「などか、さはゆるさせたまふ。」に関して、現行の諸注釈の現代語訳では概ね「どうしてそのようにお許しになったのですか」となっており、原文「さは」の「は」をそのまま生かしたものは、管見の限り見当たらない。これは「は」の用法の歴史的变化を示唆するものであり、疑問表現中に用いられた指示副詞に「は」が下接する用法は、筆者の調査によれば概ね室町末あたりを境に消滅するようである。これについては稿を改めて論じる予定である。

⁴ このようにみえてくると、コソモ連鎖構文は坂田 2021 の分類では随伴型に相当することがより明白になるであろう。

5 ちなみに無名抄には次のように、

此比誰をかもの知りたる人にはつかうまつりたるぞ、ととはれしかば、九条大納言・中院大臣などをこそは、心にくき人とはおもひて侍れ、と申ししかば、（無名抄 56）

カハ連鎖による問いに対してコソ(ハ)・ハ連鎖で応じた例がある。「か」に対しては「こそは」で応じて新情報の提示、「心にくき人」は問いの「ものしりたる人」を言い換えたものであるが、既知の情報として「は」でそのまま応じている。

6 他に、①②④の例のように「は」が本作品における叙述の中心となる人物、入道殿（＝道長）を承けることが多い点も注目される。なお⑤の例は正確には「コソハ・ハ」連鎖構文であるが参考までに挙げておく。

7 ちなみに、

秋風のふきしく松はやまながらなみたちかへる音ぞきこゆる（後撰 264）

も同様に捉えることができる。

8 なお付加型 a) はさらに、前二項に後の一項が単純に付加されたものと（モハゾ連鎖）、後一項目の付加により、直前項の係助詞の意味用法が変容をきたしているもの（ハモゾ連鎖）の二つに分類される。

参考文献

- 江口正弘 1963 『『こそあれ』考一文型と意味』『国語学』55
大野晋 1994 『係り結びの研究』岩波書店
尾上圭介 1995 『『は』の意味分化の論理』『言語』(大修館書店) 24-11
久野暉 1973 『日本文法研究』大修館書店
碁石雅利 1987 「ばこそあれ考」『聖徳学園短期大学文学研究』二
坂田一浩 2003 「もみぢ葉もぬしなき宿はなかりけり」『国語国文学研究』(熊本大学) 38
——— 2021 「古典日本語にみられる係助詞の共起—その文構成上の機能を中心に」『北陸大学紀要』51号
中村幸弘 1977 「ばこそあらめ」『國學院雑誌』78-11
——— 2015 『和歌構文論考』新典社
沼田善子 1986 「とりたて詞」(奥津敬一郎編『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社)
野村剛史 1997 「三代集ラムの構文法」(川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房)
森重敏 1967 『文体の論理』風間書房
山口堯二 1998 「複文前句における『あり』の臚化用法」『京都語文』3